タケダ電子（でんし） 株式会社

短納期　小ロットOK　試作OK　海外対応　連携力

代表取締役社長
竹之下（たけのした） 学（まなぶ）さん

需要の変化に柔軟に対応しながら信頼されるものづくりを

プリント基板の組立工場として昭和47年に創業しました。創業以来、お客様からの声に後押しされる形で基板設計や制御盤製作、配線工事・調整と仕事の幅を広げてきました。今ではプリント基板組立の比率は減り、制御盤や配電盤などのシステム制御機器の製造をメインに手がけています。お客様の要望は絶えず変化し、その要望に応えることで今の「タケダ電子」ができました。要望に応えるためにも、常に柔軟な対応を心がけています。地道で丁寧な作業、気配りの行き届いたものづくりで、お客様に信頼される堅牢な製品を提供しています。

■主な事業内容
システム制御機器の設計・製作・工事、プリント基板実装など

■主な取引先（納入先）
電機メーカーなど

住　所／〒570－0012
大阪府守口市大久保町4－29－7
TEL／06－6902－2477
FAX／06－6902－5256
創　業／昭和47年2月
設　立／平成 元 年4月
資本金／1,000万円
従業員／9名

http://www.takeda-d.jp/

生産ラインを支える システム制御機器を製造

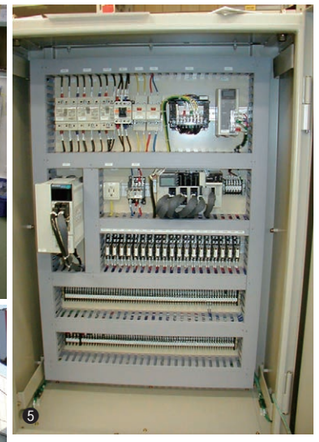
事業内容と沿革

時代で変わる顧客の需要に柔軟に対応

「タケダ電子製作所」は昭和47年にプリント基板の組立工場として創業した。当時はデジタル機器の製造が盛んになりつつある時期で、ファクシミリ用のプリント基板の作製から事業が始った。昭和54年頃に現住所に本社工場を移転し、製造業の生産ラインに使われる実装機や制御盤、配電盤などのシステム制御機器の製造へと、手がける仕事の枠を広げていった。

平成元年に社名を「タケダ電子」とした。平成9年に新社屋が完成し、大型の制御盤や配電盤の製作ができるようになった。今ではシステム制御機器の製造が会社の主力事業となっている。

大口の顧客は地元の大手電機メーカーだ。一方で、電機メーカー以外の仕事も取り込み、顧客の幅を広げている。最近では顧客の海外生産拠点が多く立ち上がっている影響で、製造する制御システムの約50％が海外向けだという。受注する仕事は一品一様。竹之下学社長は「短納期かつ丁寧なものづくりを心がけている」と力を込める。時代によって変化する需要に柔軟に対応し、顧客の信頼獲得に努めている。



❶本社工場の作業場の様子
❷ドライバ等を収めた制御ラック
❸作業の様子
❹本社工場外観
❺制御盤

強み

顧客の依頼は断らない

竹之下社長は「お客様の『なんとかしてほしい』との声をしっかり受け止める」と、事業における信条を説明する。創業以来続く顧客との長年の取引を通して、対応力を培ってきたという。「顧客の困りごとに即座に対応する」ことで、信頼と実績を重ねてきた。現在も顧客の研究開発や新規事業に関わる仕事を多く引き受けている。

顧客からの図面を受け、不備や記載漏れに対応することはもちろん、コストや部品納期、運用後のメンテナンス性なども考慮し、最適な提案をして製品を作り上げる。制御盤や分電盤などの制御機器は、顧客の依頼ごとに仕様が異なり、対応は一品一様だ。

竹之下社長は「仕事の話は断らない」との姿勢で、設計から納品までの一連の工程を請け負う。時間がかかる材料調達を短縮するため、事前に顧客から情報を得ることで短納期に対応する。例えば図面の一部を事前に入手できれば、板金加工業者に依頼して早く筐体（きょうたい）を調達できる。顧客との長年の付き合いで得た信頼関係があってこそできる対応だ。

品質管理

品質管理と安全性の徹底で顧客の要望に応える

品質や環境のマネジメントには特に気を配っている。国際基準の品質マネジメントシステム「ISO9001」と環境マネジメントシステム「ISO14001」を取得し、これらに基づいた取り組みを12年間続けている。同社で引き受ける仕事は、一品一様の受注対応がほとんど。組み立てる制御盤の仕様や規模は依頼ごとに大きく異なる。システムの受注を請け負う業者として、品質管理や安全性を徹底することはとても重要だという。手配する部品はすべて入出庫を記録している。竹之下社長は「万が一のトラブルでメーカーが自主回収などの対応を決めたとしても、仕入れ先との連携により出荷後数年間は部品の製造日やロットの確認ができる」と対処法を講じている。

また、人材の獲得と育成にも注力している。昨年2名を採用しており、社員の若返りを目指しているという。採用活動にかかる費用や労力の負担は少なくないが、竹之下社長は人材の育成を通して「会社の体力をつけていく」としている。

今後の展開

次世代への ものづくり技術の伝承で 成長目指す

景気の波にも左右されるが、製造業の設備への投資は継続して行われており、竹之下社長は「制御盤や配電盤の需要は高く仕事量も多い」と市場の動向を説明する。メーカーが海外に生産拠点を設ける動きも活発で海外への納入が増加傾向にあるが、制御システムの製作のほとんどは国内で賄われているという。その一方で、作り手の数は年々減少しており、特に若手の不足が目立つ。そのような現状を鑑みても、人材の獲得は将来の事業成長に向けての最優先課題だ。

請け負う仕事の内容も幅を広げており、搬送ロボットの配線や電池の生産ライン、画像計測装置など、多様な事業者からの要求に応える体力と技術力が求められる。竹之下社長は「誰が見てもいいと思える仕事をしないといけない」と高いレベルでのものづくりを維持したい考えだ。業界で生き残りと成長に向けては、次世代の育成と技術伝承がカギを握りそうだ。